

「日本語メガネのかけ替え」を読む

大 槻 美智子

キーワード：日本語メガネのかけ替え、日英語比較、一人称、性と言語表現、
温感表現、言語の働き、言語と記号

三省堂「国語」中学2年の教科書に、アーサー・ビナード氏の「日本語メガネのかけ替え」という書き下ろしエッセイが掲載されている。氏の『ことばメガネ』を教科書用に書きかえたと言えいいだろう。基礎ゼミⅡでこの作品を読み、模擬授業を行うということを二年間やってきた。当然だが、一つの作品としてその構造をつかみ内容を理解することからはじめなければならない。しかし、「ことば」に対する筆者の理解は深く、何気ない一文も言語学的な視点で読みを深め注釈すべきところがある。そこでそれらに対し、不十分ながらも注釈をしてみたいと思ったのが、本稿を書くきっかけである。そして、それら注釈の上に、やはり授業をする際に活用できることを書き加えたいと考えた。また、授業展開の中で、陥りやすい誤りは学生諸子の模擬授業の中から知ることができたので、それも付け加えることにした。結果、雑多な内容になったと思うが、この教材で授業を行う人に何かしらの役に立てれば幸いである。

1. 段落と構成

形式段落は1～17段落に分かれる。まず、構成について概観しておこう。

15～17段落は、この作品のまとめの部分である。言葉は「伝達の道具」であると同時に「物事を見るレンズのような役割も果たす」。だから母語以外の言語を身につければ、違ったレンズ（めがね）で世界を見ることができる。当たり前だと思っていた世界が別の秩序を持っていることを知る。絶対的なものは無く、すべては相対化される。それは世界を疑うことであり、おもしろくて退屈しない。このように、言葉の機能と同時に、母語以外の言語を身につける楽しみを伝えている文章である。

この結論に到るまでの1～16の段落には、日本語と英語とで、どんなに世界が違って見えるかということ具体的比較されている。

比較の観点は「一人称」「男女の振り分け」「温感（特にCOLDと寒・冷）」の三つである。

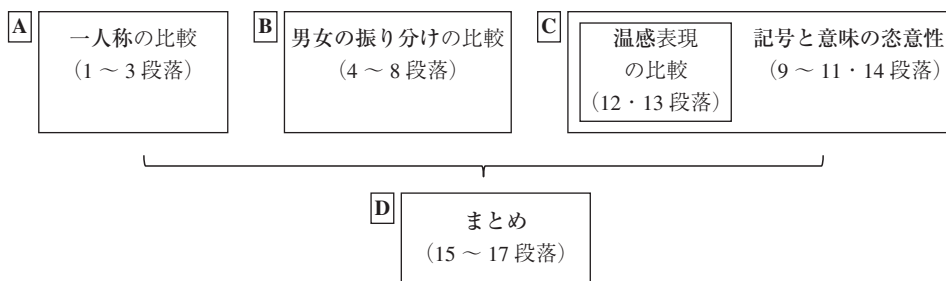
まず、第1～3段落には日本語の一人称〈自称〉の多様性と英語のその単純さが書かれている。

第4段落は、素材は「一人称」についてだが、テーマとしてはすでに「(言語による)男女の振り分け」に移っている。よって、4～8段落を一つのまとまりとする。

9～14段落は、温感表現が題材である。このうち12・13段落がこの大段落の中核であり、日英のCOLDとそれに対応する日本語の「冷たい・寒い」の比較がなされている。それを囲むように、温水と冷水の印（記号）をつけ間違える日米の配管工の話題（9・10・11・14段落）を配している。その意味で

は、この段落は、話題が二つに分散していると言える。後者（9～11、14段落）の話は、日英語の違いではなく、むしろ言語としての一般性である。HOT—温水—赤、COLD—冷水—青というような、ある概念（□の部分）と文字表記や色の結びつきとは必ずしも絶対的では無く、仮にそれが、COLD—温水—青、HOT—冷水—赤だとしても、それは成立可能な結びつきであること、つまり日本語英語に限らず、〈記号と意味の恣意性〉という、言語が持つ普遍的な事項について述べているのである（後述）。

以上を図式化すれば、次のようになる。



2. 内容

1. で全体の段落構成を示したが、次に段落毎に適宜原文をあげながら、その内容を吟味していく。小段落および大段落（A～C）ごとに参考程度の見出しをつけたが、特に小段落のものは短い段落でもあり、実際の授業の中では、必要ないかもしれない。

A 一人称の比較 「日本語は多様、英語は簡素」

第1段落 日本語で自分のことを呼ぶ言葉

「わたし」「わたくし」「あたし」「あたくし」「あっし」「ぼく」「おのれ」「おれ」「おら」「おいら」「おいどん」「おれさま」「こちとら」「うち」「われ」「わし」「わっち」「吾が輩」「小生」「愚生」「不肖」「余」「身共」「それがし」「拙者」「手前」「乃公いはずんば」——いったい自分のことをなんと呼べばいいのか、日本語を学びだしたぼくは、まずそこで迷った。

日本語には、自分のことを呼ぶ言葉が多いので、自分のことをどう呼べばいいのか迷うというのがこの段落の内容である。導入で多くの具体例が挙がっている。日本語にはこんなにもたくさんの一人称代名詞があったのかと、あらためて提示されると驚かされるが、もちろんそれは、第2段落で、英語の一人称の少なさと対比するためである。

ここに挙げられている語は、現代普通に使われる話し言葉〈わたし わたくし あたし ぼく おれ うち〉もあれば、時代劇や漫画のキャラクターが使っていたり方言に残っていたりするもの〈あたくし あっし おのれ おら おいら おいどん おれさま こちとら われ わし わっち 見共 それがし 拙者 手前〉、また、書き言葉中心で現代では使用することが少なくなった〈吾が輩 小生 小弟 愚生

不肖 余 乃公) などに、おおまかだに分けられる。

このように、日本語の一人称代名詞は、書き言葉・話し言葉の別、公私の別、相手との親疎の別など、場面や、相手と話し手との関係によって使い分けられるが、それだけでなく、たとえば「うち、もう帰るわ」「あたくし、もう帰ります」の違いからもわかるように、その人称を使う話し手自身の、性別・年齢・服装や社会的地位なども表わすのである。

第2段落：日本語の一人称は多様、英語は二つだけ

もちろんいちばん一般的な一人称として「わたし」というのを、日本語学校で最初に教わる。けれど街に出ていろんな人の話に耳を澄ましたり、本を読んだりしていると、選択肢がいっぱいあって、ジャパニーズの自称はまさに十人十色であることに気づく。英語の中で生まれ育った者にとっては、かなり衝撃的な多様性だ。自分が主語なら「アイ」、目的語へ回ったら「ミー」と、その二つの自称だけでずっと生きてきたのだから。

この段落は、日本語の一人称は多様だが、英語のそれは二つしかないという対比が書かれている。

第1段落で、「自分のことをよぶ」言葉がたくさん挙げられたのだが、これを「一人称」と呼ぶことが第2段落でははっきりする。さて、第1段落に書かれている「自分のことをよぶ」言葉と、第2段落の「一人称」・「自称」とは、必ずしも一致しないので、その点は注意を要するかと思う。

一人称とは一人称代名詞のことであり、それはまた自称とも呼ばれる(『日本語文法がわかる事典』p.230)ので、それは同義と解してよい。それに対して、「自分のことをよぶ」言葉は、人称代名詞以外にもさまざまなある。たとえば、子どもによくあるタイプだが、自分のことを「亜美、今日は早起きしたの」のように、自分の名前前で呼ぶものや、大人が子どもに向かって「先生／おとうさんは、悲しいよ」のように、その子どもから見た、話し手の役割名称を自称にするものなどである。ただし、これらは、文法用語では人称詞や自称とは呼ばないし、実際にこの説明文の冒頭に挙げられているのは人称代名詞ばかりである。だから、不用意に「自分のことを呼ぶときになんと言うか」と発問すると、このように、話し手自身の名前やさまざまな役割を表わす名詞が返ってくる可能性があるのも、注意しなければならない。あくまでも人称代名詞において英語と比較するということが必要である¹⁾。

ところで、「日本語を学びだしたばかりは、こんなにたくさんの自称をどこで勉強したのだろうか。日本語学校では「一般的な一人称として『わたし』を最初に教わる」とあるから、その後いくつかの別の自称も学んだのだろう。第4段落に「そのことについても教わり」とあるから、いくつかの自称とそれが男女によって使い分けられているということも日本語学校で学んだようである。しかし、筆者は、日本語学校だけでなく「街に出ているんな人の話に耳を澄ましたり、本を読んだりして」、日本語の一人称は「選択肢がいっぱいあって」「十人十色」であると知ったのだ。細かい言葉に注意して内容を読み取るために、下線のような質問をしてみるのも面白い。

対して、英語はどうか。主語なら「アイ」、目的語なら「ミー」の二つだけで生きてきたと筆者は言う。少し横道にそれるが、英語は、I、me だけでなく、my や mine というのもあるという指摘をする生徒もいるかもしれない。その際、I系と m-系の二つの系統しかないと言明することも可能だが、ここは、話

し手自身を直接に指す言葉は I、me であり、my や mine は所有格・所有格代名詞であり、所有物の方に指示の重点があるので、比較の対象にならないと説明するのがいいだろうと思う。

第3段落：日英語の一人称をファッションに例えてみる

もしファッションに例えていうなら、同じ簡素な制服を、物心ついてから大人になるまで毎日、なんの疑いもなく着ていた人間が、いきなり貸衣装屋に連れていかれたような気分か。あれこれ試着してみたくて、でも目移りして立ちすくむ。

第3段落は、第1・2段落で述べて来た、日本語と英語の一人称のありかたの違いやそれを知った時の筆者の気持を、例えを用いて説明している部分である。まとめてみると、右の表のようになる。

言語	特徴	例え	その他
日本語	多様	貸衣装屋の衣装	試したい
英語	簡素	制服	

簡単なようで、実に注意深く言葉が選ばれている。注目したいのは、「貸衣装屋の衣装」と「制服」だ。貸衣装は、目的や役割に応じて一時的に身にまとうものだが、単に貸衣装というだけでは、

A：その洋服すてきね。

B：ありがとう。でもこれ貸衣装なの。

のように、〈借り物〉という意味が前面に出るだろう。そうではなく、貸衣装屋の衣装という点が重要だ。貸衣装屋には多くの種類があり、それを TPO に応じて、とっかえひっかえできるということが「貸衣装屋」という言葉で、よく表されることになる。同じ人間がさまざまな役割や目的に応じて、多くの選択肢の中から相応しい装いを選び相手に対する。それは冒頭に挙げられた、日本語の一人称が、話し言葉か書き言葉か、公的か私的か、相手と親しいか隔てがあるか、自分を上品にみせるかそうでないかなどなど、相手とどう対するか、相手に自分をどうみせたいかによって、自分をさまざまに演出できる道具であることと似ている。多様な選択肢の中からその場に相応しい一つを選び、かつ、いつでも別のものに変えることができる。この点で、日本語の一人称をたとえるのに相応しい比喩である。

次の「制服」も、これを単に「服」に置き換えてみると、その表現効果はあきらかだ。単なる簡素な服ではなく、制服とあることで、それが文法上義務づけられた（強制された）語形であることを表わしているのである。

以上、大段落 **A** 「一人称の比較」のまとめとしては、「日本語は多様、英語は簡素」とする。

B 男女の振り分け 「日本語は自然界と合致、英語は強制」

第4段落：日本語－男女による使い分け〈一人称〉

第4段落は、前段まで話題になっていた一人称をそのままとりあげ、それは、男性が主に使うもの、女性が主に使うもの、男女兼用のものに分けることができると述べる。第4段落の全文を引用してみる。

とまどってしまうほど多い「自分自身」を抱え持つ日本語だが、男性が主に使うものと、女性が主に使うものと、男女兼用のものと、種類を分けることができるようだ。日本語学校では当然、そのことについても

教わり、そこが「日本語の奥深さ」への入り口だったような気がする。

それまでの「一人称」の話題に関連させながら、男女という〈性〉が言語の中にどのように組み込まれ表現されるのかという次の話題に自然につなげている。

ここでは、傍線部の「そのこと」「そこ」が何を指示しているかを問いたい。「そこ」は「そのこと」とイコールであるので、「そのこと」とは何かを考えればよい。ここでは、日本語の一人称は話し手の性別によって種類分けできるということである。このことが『日本語の奥深さ』の入り口だったような気がする。とあるのだが、「日本語の奥深さ」とはどういうことなのか、については後述したい。

また、言葉に注意して丁寧に読むという意味では、「主に」という表現は大事にしたい。たしかに、日本語の一人称には、男言葉・女言葉という大方の傾向はあるが、絶対というわけでもない。たとえば、女子がわざと「ほく」「おれ」を使うということもないわけではない。「わし」は男性の老人が使うというイメージがあるが、方言では、老女も使用するということがある。また、男女兼用の語もある。たとえば、「わたくし」は大人の女性が使うものとイメージされるが、大人の男性があらまった場面で「わたくし」を使っていて自然である。このように、男言葉・女言葉というのには一定の傾向はあるが絶対的ではない。このような場合に「主に」という言葉を用いるということを意識させることも必要だと思う。

第5段落：日本語－男女による使い分け〈終助詞〉

筆者は、男女により使用する一人称に異なりがあるという大原則を第4段落で述べたが、たとえば「だわ」は女性、「だぞ」は男性という風に、今度は終助詞にもそのような現象のあることを指摘する。男女による言葉の使い分けということが、自称だけでなく、日本語の特徴の一つであるということを印象づける段落である。

第6段落：英語－男女の振り分けを強制

女性が使う言葉と男性が使う言葉の使い分けが鮮やかな日本語は、一見男女の関係が言語によって決めつけられているように見える。けれど英訳の作業を通じて、ぼくはむしろ、自分の母語²⁾のほうが男女の振り分けを強制しているのではないかという事実気づいた。

まず、第4・5段落を受けて、日本語は「女性が使う言葉と男性が使う言葉の使い分けが鮮やか」というまとめがされている。女性なら女言葉を、男性なら男言葉を使うように言語によって仕組まれているということ、それは、今ここに存在している人間が、言語によって男か女かのどちらかに振り分けられることに等しい。だから「一見男女の関係が言語によって決めつけられているように見える」と筆者は言う（「一見」とくれば、後が逆接になるという点にも注意したい）。

しかしよく考えてみると、日本語における男女のあり方は、言わば生物としての男女のあり方を前提としているものであり、男であること女であることを強制しているわけではない。むしろ英語の方が、「男女の振り分けを強制しているのではないか」と筆者は気づくのである。そのきっかけは童話『焼かれた魚』を翻訳したことだという。

第7段落：第6段落の具体的説明

詩人の小熊秀雄が1924年に書いたこの童話『焼かれた魚』には、「魚と猫とねずみと犬とからす」が登場する。原文は、ただ、魚・猫・ねずみ・犬・からすというように種類を示す言葉で語っているだけで、雄か雌かなどは書かれていない。しかし、

英語では全員を he と she どちらかにはめ込む必要がある。というのは、最初に fish か cat あるいは rat と呼んだあと、代名詞に切替えなければ不自然だからだ。全て it を用いると、物として乱暴に扱っていきなり、「彼」か「彼女」を選ぶ以外に選択肢はない。そこでねずみを he に、犬も he に、猫は三毛なので she に、からすも she に、そして数ヶ月悩んで、魚は he にした。

英語では、童話の中で人間のようにふるまうこれらの登場人物は、物 (it) として扱うことはできず、人と同じように she か he で語らなければならない。これらの登場者の性別をどう設定するかで、童話世界のイメージも変わってくるに違いない。だから、筆者は主人公の魚の性別を決めるのに数ヶ月かかった。

たしかに、雌雄のわからないものや、分ける必要のないものを、男女に振り分ける必要のある英語は、「男女の振り分けを強制している」と言えるだろう。

第8段落：日本語－魚は「魚」のままでよい

バイリンガルの絵本となった今でも、読み直せば、はたして魚は he でよかったのかと再び迷う。「魚」のままで最後まで語れる日本語の包容力が、自然界と合致している感じがする。なにしろ海は混浴なのだ。

英語では、それが物として扱われる以外は、代名詞にする時、強制的に男女に振り分けなければならない。それに比べて、日本語は「『魚』のままで最後まで語れる」。これを筆者は「日本語の包容力」と言っている。日本語の包容力とは、ここでは「自然界と合致している」ということである。「なにしろ海は混浴なのだ」には、海には雌も雄もいる、それが自然の姿なのだから、それを、(童話の中とは言え) he か she のどちらかに特定しなければならないことは、自然界のあり方に対する言語による強制であるという筆者の考えがこめられている。第6段で、英語の方が「男女の振り分けを強制している」と考えた理由がここであきらかになった。

また、筆者は直接には言及していないが、「日本語の包容力」には、魚を「魚」のまま語れるということだけでなく、日本語の男女による言葉の使い分けということも含めることができるのではないだろうか。男と女というものが存在していて、その自然界と合致した存在のあり方に基づいて³⁾、男は男言葉を、女は女言葉を話す。その意味で、自然界と合致したあり方(つまり包容力)と言えるのではないかということである。たしかにこの日本語の仕組みは、男女の性差を際立たせることにはなっていないが、英語のように、性の区別のないところまで、男女の区別を導入する⁴⁾ものではない。

第4段落で、男女で言葉遣いが異なるということが、「『日本語の奥深さ』への入り口だったような気がする」という筆者の言葉があったが、「日本語の奥深さ」とは「日本語の包容力」つまり「自然界と合致している」ということなのではないかという推測ができる。この点については、C の内容も含めて後に

述べたい。

以上、大段落 B のまとめは、男女の振り分け-「日本語は自然界と合致、英語は強制」とする。

C 温感表現（「熱の少ない状態」について）「日本語は哺乳類のセンスあり、英語は無し」

第9段落：「HOT」からは冷水、「COLD」からは湯水（アメリカ：オハイオ）

第14段落：「赤」からは冷水、「青」からは温水（日本：東京）

第9段落は、三つ目の題材「温感表現」への導入である。14段落と呼応して、アメリカにも日本にも、通常の〈記号と意味の結びつき〉を解消してしまう「うっかり者の配管工」がいるというエピソードが書かれている。そしてこの二つの段落が意味していることが、10段落で説明される。

第10段落：意味と記号の結びつきは絶対ではない

そのことをいったん心得てしまえば、普通に入浴できるのでどうということもなかったが、熱いのを求めようと「コールド」に手を伸ばす自分が、たまにふっとおかしく思えた。COLD とはなんぞやなんていう本質論よりも、言語をうたぐる方向に思考が進むこともあった。COLD を以前ディクショナリーで引いてみたら、「熱が少ない状態」とあって、よけいおかしく思えた。

通常なら、「HOT—湯水—赤」「COLD—冷水—青」というように、温水・冷水という意味と記号（音声、文字表記、色）の結びつきは、言語や習慣によって決まっている。それがあってはじめて言葉は通じるし、日常生活は支障なく営まれる。しかし、筆者の自宅の浴室や東京の友人のマンションでは、その結びつきが逆になってしまっている。「そのことをいったん心得てしまえば普通に入浴できるのでどうということもなかったが」とあるように、「HOT—冷水—赤」「COLD—温水—青」であったとしても、人間はそれに慣れ、それが普通になってしまうものであるらしい。

とはいえ、日常の言語生活では「HOT—温水」「COLD—冷水」の世界に生きているのに、浴室の中だけでは逆の法則に従っている自分が「たまにふっとおかしく思えた」りすると筆者は言う。そうすると当然、次には「言葉って何なんだ？」という方向に思考が進んでいくだろう。「言語をうたぐる方向に思考が進む」とは、意味とそれを表わす記号（符号）の結びつきが、必ずしもそれでなければならないという必然的なものではなく、かろうじて社会慣習的な約束事の上に成り立っているものだという、言語の不確かさに気付いたということである。このような、意味と記号の結びつきの非必然性を、言語学の用語では「言語の恣意（しい）性」と言う。

辞書の定義がまた興味深い。辞書によれば、COLD は「熱が少ない状態」であるという。そうすると、HOT と COLD は、熱の量が多いか少ないかという違いだけであって、〈熱がある〉という意味では同じ範疇に入る語だということになる。日常生活では HOT と COLD は反対概念として意識し区別しているのに、「言葉って何なんだ」という疑問がまた一つ付け加わることになり、自分の浴室での行為が「よけいおかしく思えた」というのである⁵⁾。このエピソードには、対義性とは実は同義性の上に成り立っているという逆接があるわけで、それもまた意味の本質なのである。筆者は、HOT・COLD という文字表記と、それが指し示すものとのずれを体験する中で、言語の二つの特質を発見したと言えるだろう。

本旨とはかわからないが、この段落で注意すべき言葉は「うたぐる」である。「うたぐる」は「うたがう+かんぐる」が合体してできた混淆語（カバン語とも）で、俗な言い方であることが辞書（『明鏡国語辞典』、『精選版日本国語大辞典』）にも記されている。語の成立ちなどの説明が必要だろう。読んですぐに違和感をおぼえる言葉で、教科書なら「うたがう」とあるべきところだ。しかし、「うたがう」では、事態を否定する強い意味が生じてしまう。そのことに配慮しての選択かもしれない。それにしても、筆者はこのような語をどこで習得したのだろうかという別の興味がわく。

第 11 段落：記号の切り取り方は一つではない

来日して最初に住んだ六畳間は、風呂がなく、夜な夜な銭湯のカランと大浴槽の世話になった。部屋にあったのは洗面台を兼ねた流しで、その蛇口の金属製のとってが一個のみ。朝起きると顔をバシャバシャ洗い、気温と連動するその水温を毎日、まるで「日替わりウォーター」みたいな感覚で楽しんでいた。

この段落の意味を考えてみよう。

まず、前段とのつながりという点で言うと、オハイオに居た筆者が来日したという、時間的な流れという点でつながっている。が、もう一つの花がは、蛇口の問題である。前段では、二つの蛇口で温水と冷水を出し分けていた（その組み合わせは日常の言語とは逆であるにせよ）という話であったが、日本に来て、蛇口が一つの生活となる。蛇口の数は何かを意味しているのだろうか。単にそれが実際の生活であったといえればそれまでだが、前段落から引続き、言語の〈記号と意味〉の関係を読み取ることが可能である。

蛇口は、記号である。前段落までは、二つの蛇口（HOT と COLD／赤と青）に、二つの物（温水と冷水）が対応していた。とすると、一つの蛇口とは、二つに分けていたものを一つの蛇口（記号）で表わすということの比喩であると考えられる。そして、蛇口一つの具体例はごく身近に存在している。たとえば、湯と水は日本語では二語に区別する（＝二つの蛇口で表わす）が、英語では water 一語（＝蛇口一つ）ですませることができるというようなものである。water はそれだけで、湯の意味にも水の意味にも使うことができるという。〇

現実世界の切り取り方は、一つではない。同じ対象を二つの記号によって表わす言語もあれば、一つですませる言語もある、あるいは二つ以上の記号を費やす言語もあるだろう。言葉が、現実世界の事物を切り取る切り取り方はさまざまなのである。もちろんこの段落では、筆者は直接に〈記号と意味〉の話をしていないわけではないので、授業では、実際の生活の描写として読んで差し支えない。ただ、この段落は「蛇口」の関連から〈記号と意味〉のずれの比喩としても読め、そう読んだ場合、何が言えるかということを書いて見た。

次に、この段落は後の 12 段落へのつなぎの役割をしている。つなぎの役割というのにも、やはり二つある。一つは「気温と連動するその水温」という言葉が、「気温とともに上下する体温」という変温動物のそれを意識し、その先触れになっているという点。もうひとつは（教材としてはこちらの方が大事だが）、来日して日本語を勉強するうちに「COLD」が大ざっぱな概念であると気づくそのきっかけとなる生活であるという点である。

第 12 段落：英語の COLD は日本語では「寒い・冷たい」に分けられる

同時に日本語も少しずつわかるようになり、そんな中で、あるとき判明した——ぼくの COLD の概念が大ざっぱすぎて使い物にならない！今まで体験した「熱が少ない状態」を、全て早急に「寒い」と「冷たい」に振り分けなければ、日本語でコールドはまともに語れない。

まず最初の文で、筆者は「COLD の概念が大ざっぱで使い物にならない」と嘆く。大ざっぱすぎるとは、COLD が「寒い」と「冷たい」を区別できないおおまかで粗雑な言葉だということであり、「使い物にならない」とは、「寒い」と「冷たい」を使い分けなければ、日本語で「熱が少ない状態」(＝日本語で書けば「コールド」)を語れない(＝日常生活ができない)ということである。筆者の衝撃の深さの故か、感情的な表現になっているが、事柄としては、英語の COLD は日本語では「寒い」と「冷たい」に分けられるということである。

授業中にそれを確かめるなら、次の①～⑥のような英文を訳させてみてはどうだろう。①～③は寒い、④～⑥は冷たいと訳さなければならず、それによって、COLD を「寒い」と「冷たい」に分けなければならないという筆者の発見が体感できるのでないだろうか。

- ① It's cold today.
- ② I feel cold in this room.
- ③ January is the coldest of all the months in Japan.
- ④ Her skin felt cold and rough.
- ⑤ Do you have some cold water?
- ⑥ I sat on the cold floor.

第 13 段落：全身で感知する「寒い」、体の一部で感じる「冷たい」

12 段落で、英語の COLD にあたる概念は、日本語では「寒い」と「冷たい」という二つの言葉で表わし分けているとあった。となると、日本人の方が慌てる。一体「寒い」と「冷たい」はどう違うのか。しかし、慌てる間もなく、その答えは筆者によってすぐに明かされる。表にすれば次のようになる。

英語	日本語	意味
COLD	寒さ	全身で感知する
	冷たさ	体の一部で感じる

全身で感知する寒さ、体の一部で感じる冷たさ、その違いがだんだん身にしみてくると、なるほど、これは哺乳類ならではのセンス。ヘビやトカゲのように体温が気温とともに上下する生物は、ただ COLD で十分だろうが、体内をわざわざ一定の温かさに保つのであれば、「寒」と「冷」を区別するスマートさがあるべき。

この段落では、二つのことを考えたい。

一つは「寒い」「冷たい」の違いが、筆者がいうようなものなのかどうか。もう一つは、「哺乳類ならではのセンス」というのはどういうことなのかということである。

一つ目、「寒い」と「冷たい」の違いについてだが、筆者のあげている「全身／体の一部」という説明は、国広哲弥 1965「日英温度形容詞の意義素の構造と体系」の、「サムイなどの感覚が起るのは」「体の全部——体表面のほとんど全部にわたってかなり深部まで（すなわち体温調整を司る自律神経系をかなり強く刺激する程度に）」であり、冷たいは「体の一部（略）要するに体の極小部分だけが温度的影響を受けるという意味である」に拠るものと思われる⁷⁾。

この教材で授業をする時、寒いと冷たいを使う状況をいくつかあげて、筆者の考えを確認するとよいと思うが、その際の例文には、注意が必要である。たとえば、「タオルが冷たい」「床が冷たい」は顔や手、足など体の一部で感じる例なので本文の内容と合うが、「風が冷たい」「飛び込んだプールの水が冷たかった」などは、体全体で感じているとも言えるので、このような例をあげると説明が難しくなる。寒いでは、「部屋が寒い」「今日は寒い」「身体が寒い」はよいが、「肩口が寒い」「足元が寒い」「襟足が寒い」などは体の一部分の感覚ということもできるので、注意が必要だ。

また、このように基本的な意味の違いを考える場合には、「彼女が冷たい」「態度が冷たい」/「懐が寒い」「ギャグが寒い」などの比喩的なものをあげてはいけない。

二つ目、「これは哺乳類ならではのセンス」というのは、どういうことだろうか。先ほどの国広 1967でも温感語彙については体温と深くかかわることが意識されているが、ここは筆者の「体内をわざわざ一定の温かさに保つのであれば、『寒』と『冷』を区別するスマートさがあるべき」という言葉から考えて見よう。

たとえば、体温を仮に 36 度と設定してみると、我々の経験からして（湿度や風などの関係もあるが）、外気温が 35 度の時には「暑い」、20 度位の時には「涼しい又は暖かい」、5 度位なら「寒い」と感じるのではないだろうか。しかし、変温動物では、体温が気温と共に上下するので、外気温と体温との差はほぼ一定であり、暑いとか寒いという感覚は生じないと考えられる。

一方、冷たいはどうだろう。恒温動物であれ変温動物であれ、対象と接触して体の一部から多くの熱がうばわれる時に感じるのが「冷たさ」である。「ヘビヤトカゲのように体温が気温とともに上下する生物は、ただ COLD で十分だろうが」とあるように、冷たいや COLD は変温動物にもあり得るが、寒いという感覚は、先に見たように恒温動物である哺乳類に特有の感覚だということになる。日本語ではこの感覚を語として分けているのが、スマート（賢い／しゃれている）だということである。

温感表現（「熱の少ない状態」）について、C のまとめはいくつか考えられる。「日本語は哺乳類のセンスあり、英語は無し」、あるいは事実だけを書いて「英語は COLD、日本語は寒いと冷たい」とすることもできるだろう。ここでは、はじめのものを仮に C の見出しに置いた。

さて、ここで再度注目したいのは、4 段落にある『『日本語の奥深さ』への入り口』という言葉である。一人称の多様さではまだ「奥深さ」を感じていなかった筆者は、男女の言葉の使い分けというところから、次第に「奥深さ」を感じるようになったようだ。

英語の方が男女の振り分けを強制している、と気づいた筆者は、fish を fish（魚）のままに語れる日本語の方が、「自然界と合致している」（8 段落）と感じる。それが日本語の包容力でもあると言う。つまり

英語は言語上の規則によって自然界とは異なる秩序を強制しているわけだが、日本語の方は、現実の世界をそのまま写していると言うのである。

寒い・冷たいの使い分けに関しても、同様のことを筆者は感じて「哺乳類ならではのスマートさ」という言い方をしていると考えられる。人間は、哺乳類であり恒温動物であるから、外気温と体温との差から人間が体感する「寒い」と、物質に体の一部が接触して熱がうばわれる「冷たさ」とを区別するのは、人間の現実世界と合致していると言えるのである。筆者は、英語との比較を通して、日本語が現実世界を反映しているという特徴を感じとったのではないか。そして、それを「日本語の奥深さ」と表現したのではないだろうか。

そう考えて、振り返ってみると、筆者は気づいていなかったかもしれないが（少なくとも言及はない）、日本語の一人称の多様さというのも、現実の人間のさまざまな側面・関係性を写しているということができる。英語の I（と me）や You は、言語という場面上での話し手と聞き手という役割を浮かび上がらせるが、現実の多様な関係としての私やあなたを表現するものではない。

以上のように、少なくともこのエッセイに取り上げられている日本語の三つの事例は、日本語が現実世界に対応してそれをそのまま写すという特徴をもっており、それを筆者は「奥深さ」と表現したと解することができるのである。

さて、ここまで授業を進めてきて注意すべきことは、日本語の方が英語より、事物を細かく分けているから繊細であるとか、日本語は「奥深い」から優れているとかいうような単純な感想を抱かせないことである。確かに自称や温感表現（寒冷）は日本語の方が細かく分けていたが、一方で、日本語では「飲む」一語で表すところを、英語では「(液体を口から直接) drink, (お茶や薬) take, (ごくんと飲み込む) swallow, (スプーンなどをつかって) eat, (茶や酒をちびちび飲む) sip」などと使い分ける（『オーレックス和英辞典』、鈴木 1973 参照）。このような例は探せばいろいろ見つかるだろう⁸⁾。それぞれの言語にはそれぞれの論理があるのだということを、この作品を読み終えた後で知らせたい。

D 言葉はメガネ——かけ替えを楽しもう！

第 15 段落：言葉は物事を見るレンズの役割を果たす

言葉はぼくらの伝達の道具＝コミュニケーションのツールとして機能している。しかしそれだけでなく、物事を見るレンズのような役割も果たす。英語で育った者が、「英語メガネ」を通して世界を眺め、日本語が母語の者は「日本語メガネ」をかけた状態でこの世を見回している。母語以外のもう一つの言語を身につければ、メガネのかけ替えが可能になる。

まとめの段落である。日本語メガネという題の意味がここであきらかになる。言葉は伝達の道具というだけでなく「物事を見るレンズのような役割も果たす」というのが、言葉に対する筆者の主張だ。レンズには、カメラで言えば、魚眼レンズ・広角レンズ・標準レンズ・望遠レンズなどがあるように、焦点距離の違いによりそれぞれ写る範囲や見え方が異なる。つまり、レンズとはそれを通して見ることで、もの見え方が違って見えるという代物だ。英語で育った者は、話し手である自分のことを I や me としか見ないが、日本語では自分の性別や多様な人間関係を意識して見ている。童話に出てきた魚は日本語ではずっ

と「魚」として見ればよいが、英語では男か女かを選ばなければならない。日本語で「寒い」と「冷たい」に分ける状態も、英語では COLD 一語で表わし、それを分けるということは考え（見え）もしない。

このように、英語の中で生まれ育った者は、英語レンズを使った英語メガネを通して世界を眺めているし、日本語が母語の者は、日本語レンズを使った日本語メガネを通してこの世を見回しているというのである。言葉にこのような働きがあるということ自体、中学生にとっては興味深いことに違いない。

そして、もう一つ、筆者が教えてくれるのは、「母語以外のもう一つの言語を身につければ、メガネのかけ替えが可能になる」ということだ。「メガネのかけ替え」をすれば、違ったものの見方ができるということで、それこそ、筆者の一番言いたい事だろう。なにしろ題が「日本語メガネのかけ替え」なのだから。

第 16・17 段落：ことばメガネがふえるとおもしろい

日本語を身につけて、ぼくにとって何がいちばんおもしろいかといえば、日本語メガネが使えるようになったことだ。じっと見つめるということは、うたぐることでもあり、ぼくは英語と日本語の両方のレンズで周りを絶えずうたぐり、退屈することはまるでない。

周りのみんなにとっては、じろじろ見られて迷惑する場合も、あるかもしれないが。

なぜ、「メガネのかけ替え」をすすめるのかという理由が書かれている。それは、自分自身が日本語を身につけて日本語メガネが使えるようになったので、英語と日本語両方のレンズで世の中を眺めることができる。すると今までそれしかないと思っていたことが、それでもなくもいいのではないか、別のあり方や可能性があるのではないかというように、既存のものを疑う気持ちが出てきたというのだ、そして周りを絶えずうたぐっているのだから、退屈することがまるでないと言う。

この部分は、他言語を身につけること（外国語学習）の意味を、考えさせるものである。日本人の外国語学習には目的が無い、なんのために外国語を学ぶのかよくわからないなどと言う声が聞かれる。もし明確な目的があるとすれば、たとえば、英語を身につければ、日本における社会的経済的地位が保障されとか、ビジネスや海外旅行の時に役に立つからというような実利的な理由が多いように思う。それもそれでよいが、ここで筆者がかかげているのは、他言語を学ぶことで、新しいものの見方を手に入れようというかなり知的な興味・好奇心である。それが中学生の心にどれくらい響くかはわからないが、そういう目的もあるんだということを知るのも決して無駄ではないだろう。

ついでにいえば、筆者がいかにして日本語を学び、この「書き下ろし」を自身で書けるまでに日本語を見つけたかということも読み取らせることができる。日本語学校に行ったということの上に、たとえば、段落 2 の「街に出ているんな人の話に耳を澄ましたり、本を読んだりし」たこと、段落 5 の「語学というものは説明や理屈よりも、むしろオウム返的な、相手が言った言葉を繰り返してまねることが基本だ」というような、他言語を修得する方法も学ぶことができるのである。

最後に

最後に教科書の最後にある課題について検討しておこう。この教材の末尾に「学びの道しるべ」という

ページがある。「ひとりで学ぶ」個人学習と、「みんなで学ぶ」共同学習に分けており、「筆者のものの見方や考え方について意見をもち、お互いに交流する学習」をめざしている（指導書 p.241）とあるところから、「ひとりで学ぶ」「みんなで学ぶ」の二段階学習で課題を深める意図のように読める。

しかし、実際の課題設定では、「ひとりで学ぶ」「みんなで学ぶ」がそれぞれ独立していて関係はない。「ひとりで学ぶ」では「日本語の一人称の多様性から筆者が考えたことをまとめよう」であり、評価規準は「日本語の一人称のそれぞれがどのような使われ方をしているのかを確かめて、言葉の語感について考えている」となっている。しかし、段落1に挙げられた多くの一人称の語感を一人で確かめるという問題設定自体、大変難しい。この課題は「みんなで」話し合っこそ深められるものだと思う。

もう一つ「みんなで学ぶ」には「筆者は次の二つのことから、英語と日本語の物事の捉え方にはどんな違いがあるかといっているのか、話し合おう」とある。その二つの課題とは、次のようなものだ。

- ・「ねずみを he に、犬も he に、猫は三毛なので she に、からすも she に、そして数ヶ月悩んで、魚は he にした」（198 ページ 9 行め）
- ・「HOT と COLD」（198 ページ 17 行め）

一つ目の問いに対する答えは（指導書には答えは記されていない）、日本語は「ねずみ 犬 猫 からす 魚」のまま語れるが、英語は代名詞の時、he か she かどちらかを選ばなければならない。つまり英語は男女の振り分けを強制しているが、日本語は自然界と合致してなるだろう。二つ目の課題はどういうことなのだろうか。HOT と COLD が書かれたレトロなカランの話から、日本語と英語の物事の捉え方をどうやって導くのだろうか。この大段落では、COLD と寒冷の捉え方の違いは書かれているが、HOT と暑熱の違いについては記述がないのだから、この課題設定は不思議である。

最後に「学びを振り返る」という部分があり、「この文章の題を『日本語メガネのかけ替え』としたのはなぜか。その理由を書いてまとめよう」という課題が提示されている。まとめとして相応しい課題である。また、指導書の指導案には、その前提として「日本語メガネ」「英語メガネ」とはどういうことを指しているのかを考え意見交流するという案が示されている。

「日本語メガネ」「英語メガネ」とは、それぞれの言語には、特有のものの見方や考え方があるということの意味している。そのことを踏まえた上で、題を「日本語メガネのかけ替え」としたことの理由を考えてみようという流れで妥当だ。

さて、その答えだが（指導書には答えはない）、「日本語メガネのかけ替え」は「日本語メガネを他の言葉メガネにかけ替える」という解釈をすることが第一義だろうが、「他の言葉メガネから日本語メガネにかけ替える」という解釈も出来そうである。たとえば「問題の解決」「愛情の表現」では「の」は「を」に置き換えられ、「受験の成功」では「に」に置き換えることができる。

これをふまえると、前者の解釈では、「日本のみなさん、日本語メガネを他の言葉メガネにかけ替えてみませんか、楽しいですよ」というメッセージであり、後者の解釈も入れれば「私は日本語メガネを英語メガネにかけ替え、また英語メガネを日本語メガネにかけ替えて、楽しんでますよ（みなさんも母語以外の言葉メガネを手に入れ、二つをかけ替えて楽しんでみませんか）」というメッセージになるだろう。16 段落 17 段落の内容を考えれば、後者の解釈の方がよさそうである。

「日本語メガネのかけ替え」は、筆者の経験から得た三つの題材（一人称・性・温感）を通して日本語と英語の違いをあきらかにし、日本語というメガネ（レンズ）を通して見える世界と、英語というメガネ（レンズ）を通して見える世界がどのように異なるかを具体的に述べる。そして二つのメガネをかけ替えることで、今まで自分が知らなかった世界が見えるだけでなく、当たり前だと思っていた世界を「うたぐる」ことのおもしろさを読者に伝えようとするエッセイである。

中学校の実際の授業では、以上の骨格が読み取れば十分なのだが、本稿では文や語の一つ一つの意味を細かく考えていくと、どのようなことが見えてくるのかを書いてみた。そこには筆者アーサー・ビナーD氏の言語に対する深い教養が隠されていたと思う。〈骨格〉を読み取った後に、言葉に対するさまざまな興味をかき立てるという意味で、本稿を参考に「ことばの授業」を組み立ててもらえれば幸いである。

注

- 1) 鈴木 1973 によれば、さまざまな名詞（親族名称・地位名称・固有名詞）を「人を表わすことば」として用いる日本語では、人称代名詞もそれらの言葉の中の一つとして位置づけるべきであり、西洋の人称代名詞とは性格を異にするものであるとしている。また、そこから、氏は、自称（自分を示す）・対称（相手を示す）・他称（対話の中に登場する第三者を示す）などの術語を、人称代名詞だけではなく、「親族名称・地位名称などと一括して」の呼称とする方が適切だと述べている（pp.129～135）。
- 2) このエッセイの筆者は母語という言葉を用いていて好ましい。今日でも、母語の代りに母国語という言葉を使う人がいるが、これは問題である。英語の Mother Tongue（周りの身近な人たちから自然に身についた言語）を最初母国語と訳したようだが、この訳語は、母国が一つでかつ母国には一つの言語しかないという稀な場合にのみ成り立つもので、概ね「母国」とは何かという厄介な問題を抱えることになる。たとえばアメリカ生まれアメリカ育ちであっても第1言語はスペイン語という時、Mother Tongue は当然スペイン語だが、これを母国語と訳せば、母国を代表する言語という意味になり、それは当然スペイン語ではない。また、スイスには三つの公用語（国語でもある）があり、ドイツ語圏・フランス語圏・イタリア語圏に分かれている。ドイツ語圏に生まれたスイス人の Mother Tongue はドイツ語（スイス訛）だが、母国の言語はドイツ語・フランス語・イタリア語と三種類もあることになり、この場合も Mother Tongue と母国語という訳語は一致しないのである。母国語は訳語として相応しくないことがわかる。
- 3) 性同一障害など、男女の区別が自明のことではないことは、近年あきらかになってきているが、生物学的な男女の区別を素朴に信じ、またそれに基づいて、男言葉女言葉というものが存在したところから見ての言述である。
- 4) 一般にヨーロッパの言語は数による区別がはなはだしく、名詞は女性名詞・男性名詞、さらに中性名詞に分けるものもある（ラテン語・ドイツ語）、定冠詞・形容詞も、女性名詞を修飾するときと男性名詞を修飾する時では語形が異なる。たとえばフランス語で言うと、花瓶 vase は男性名詞、テーブルは table 女性名詞、un は単数男性形、une は単数女性形、「立派な」が男性名詞に続く時は excellent、女性名詞に続く時は excellente となる。これらをあわせると、次のようになる。
一つの立派な花瓶 ……Un excellent vase
一つの立派なテーブル……Une excellente table
- 5) 西江 2003 に興味深い例があげられている。「フランス語には『深い』という単語はあるけれど『浅い』という単語はない。『浅い』は『少々深い』ということで事足りている（p.98）という。HOT と COLD の関係も、このように同義性のフィールドでとらえることができるのである。
- 6) 『ジーニアス英和大辞典』、鈴木孝夫 1973（pp.34～37）など参照。
- 7) この説に対して、渡辺実 1996 は一部修正を施し、「『体の一部・体の全体』というのは、『接触感を伴うか否か』という形に改めた方が、より適切なように思われる」としている（p.17）。その根拠として、「急にプールにとび込んだときなどは、体全体が水につかかっていて『ツメタイ』と言う。毛布にくるまって寝る夜などに、体の一部だけが『肩のあたりがサムイ』と言う」（傍点本稿筆者）などの例をあげ、「つまるところ、接触感覚の有り無しが、

日本語の場合には一つの意義特徴としてはたらいっている、と認められるのではあるまいか」とまとめている。

しかし、接触感を伴うか否かよりは、それが話し手の体温に根ざした体感(サムイ)なのか、あるいは物の温度の低さ(ツメタイ)なのか、ということであろうというのが、本稿の筆者の考えである(未稿)。たとえば、「(冬の晴れた日)日射しは暖かいけれど、空気はツメタイね」と言うことがある。空気は「一気圧に保たれ(略)接触感覚と言うべきものを伴わなくなっている」(『日本語概説)と考えられるけれども、ツメタイを用いる。これが可能なのは、空気を〈物質〉として見ており、その温度を問題にしているからだと考えられる。

「(自分の)手が冷たい」や「体の芯が冷たい」などは、一応「体の一部」であるので、国広説でも説明できそう。一方、渡辺説の、ツメタイには接触感があるというのではこの二つの例は説明出来ない。渡辺は前者(手)については「触れなくても(略)指先こそは接触感覚の代表だから」ツメタイが使えるのだらうと言っている。しかし、「体の芯」ではその説明もあてはまらない。自分の肉体の一部ではあるが、それは体全体で感じる感覚ではなく、手や芯という部分=物質と捉えることで解決できるように思う。この点については稿を改めたい。

- 8) COLD と寒冷の場合のように、日英語の言葉の示す範囲がいつも対応するとは限らないので注意しなければならない。親族名称を含め名詞類は比較的うまくいくが、形容詞や動詞の場合は、日英それぞれの語の切り取り方が、ずれながら一部分でのみ重なっているという場合があるので、注意する必要がある。日英語の意味対応の範囲がずれる例については、鈴木 1973 (pp.6~10) を参照のこと。

参考・引用文献

- 国広哲弥 (1965) 「日英温度形容詞の意義素の構造と体系」『国語学』第 60 集、『構造的意味論』に再録
鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波新書
渡辺 実 (1996) 『日本語概説』岩波テキストボックス
西江雅之 (2003) 『「ことば」の課外授業』洋泉社新書
林巨樹・池上秋彦・安藤千鶴子編 (2004) 『日本語文法がわかる事典』東京堂出版
小熊秀雄著、アーサー・ビナード翻訳、市川曜子絵 (2006) 『焼かれた魚 - The Grilled fish』パロル舎
アーサー・ビナード (2010) 『ことばメガネ』大月書店

辞書 (電子辞書版)

- 『ジーニアス英和大辞典』(2001) 大修館
『オーレックス和英辞典』(2008) 旺文社
『明鏡国語辞典 第二版』(2011) 大修館書店
『精選版日本国語大辞典』(2006) 小学館